

Saducation 2084

```

define Dildo_vagina [stendia=45,stemlength=200,glansdia=55; stroke_max=50,frequency_max=10]
define Dildo_anus [stendia=40,stemlength=300, glansdia=50; stroke_max=100,frequency_max=10]
define Alligator_nipple [size=Large pressure=50 volt_max=200 current_max=5 Frequency=1 to 80]
define Alligator_clitoris [size=middle pressure=40 volt_max=200 current_max=5 Frequency=1 to 80]

set Bitch @ piledriver_position with legs open
    [strain(arms, legs, waist)] , options(Ball_gag(no_ventilation), Eyemask)
insert Dildo_v into cunt
insert Dildo_a into ass
clip Alligator_nipple, Alligator_nipple, Alligator_clitoris

While ((orgasmcount<5 or orgasmcontinum<100) and (pulsatic          easure<220 breath<30))
    Start Dildo_vagina(30,3)
    Start Dildo_anus(50,2)
    energize Alligator_nipple(50,1,5)
    energize Alligator_clitoris(60,2,2)
    call Dildo_adjust
    call Alligator_adjust

Wend

```



(幻案：情事OL)

Horikado Nagayasu

目次

拘束.....	- 2 -
獄房.....	- 9 -
矯正.....	- 27 -
講習	- 60 -
作業	- 70 -
遊戯	- 103 -
面接	- 132 -
妊活	- 141 -
継続	- 167 -
後書き	- 171 -

この作品はフィクションです。実在する(した)人物・地名・組織・史実・年齢とはいっさい関係がありません。また、特定の思想などを賛美もしくは非難するものでもありません。

拘束

初出勤を祝福してくれるような九月の爽やかな風。先月に十八歳の誕生日を迎えて、

listener
聴者認定も受けたし。いよいよ一人前の社会人としての生活が始まる。成人としての責任は分かっているつもりだけど、スキップでも踏みたい気分。

メトロの駅へ向かう彼女をパトカーがゆっくりと追い越して――すぐ前で停まった。

警官が降りて、彼女に向かい合う。

「警察の者です」

バッジを提示される前に、警官の頭上にIDナンバーと認証標が表示されている。

「きみは、マリア418だね？」

正確にはマリア・スコット、ID173202236092418。相手が警官なら、それを承知の上での形式的質問だ。

しかし、マリアの答えに対する警官の対応は、まったく形式的ではなかった。

「きみは危険レベルの潜在的な社会不適応者と

判定された。矯正治療の対象として拘束される。ただいまより、きみの人権は治療完了まで凍結される」

「え……？」

ほとんど理解不能な警官の言葉。戸惑っているうちに、マリアはパトカーの後部座席に押し込まれた。続いて警官も乗り込んで、反対側のドアからも、もう一人がマリアをサンドイッチにした。

三方向の窓ガラスが黒くなった。前席のバックレストからは黒い仕切板がせり上がって——マリアは文字通りブラックボックスに閉じ込められた。

(ポパイ。状況を説明してちょうだい)

漠然とした思考としてではなく、マリアは明晰な言語を頭の中に紡いだ。

「*申し訳ありません。A Z オーバーライドにより、あなたへの一切の情報提供を禁じられました」

ポパイの声がイヤホンに響いて——視界の隅に点在していた各種のアイコンが消失した。

マリアは、裸で外に放り出されたような不安に襲われた。

「ねえ。どういうことなの。説明してください

い」

二人の警官は無言。行動で答えた。マリアを前かがみにさせて両手を背中へねじ上げ、手錠を掛けたのだ。

後ろ手錠は、被拘束者が暴れて自他に危害を及ぼす懸念がある場合に限られる。それを知っていたマリアは、ますます衝撃を深めた。どころか。

警官が両側からマリアの膝をつかんで脚を開かせ、自分の太腿の上に乗せた。片手で脚を押さえておいて――左側の警官が、開脚させた中心へ手を差し入れて、ショーツの中にまで指を入れてきた。同時に右側の警官が、ボタンが千切れるのもかまわずブラウスに手を入れブラジャーを強引にずり上げる。

「やめてください。性的接触に同意しません」

悪徳警官という言葉が日用辞書から消えて四半世紀。この行為も警官の職務遂行としか考えられないマリアは、言葉で抗議はしても、身もがきは肉体の不随意的な反応にとどまっていた。

股間を指でなぞっていた警官がショーツを引き千切った。それを丸めて握り込んで――不意にマリアの腹を殴りつける。

「うぶっ……もごお」

苦痛に呻く口に、元はショーツだった布切れを押し込まれた。

「滅多にない人権凍結案件だ。ボーナスを愉しませてもらうぜ」

人権凍結の意味を、マリアはショーツと共に噛み締める。ショーツを吐き出そうと思えば出来るだろうけれど、もっと非道いことをされかねない。

突然の理不尽な災厄。しかもパーソナルAIの助言も得られない。マリアはすっかり動転して怯えながら、自分の肉体をボーナスとして扱われるにまかせるしかなかった。

パトカーはゆっくりと走って、途中で二度停止したのは、^{monitor}走行監視を交代してボーナスを公平に分配するためだった。それでも二十分ほどでマリアは——アイマスクで視界を奪われて、パトカーから降ろされた。それまでの間、マリアは女性器を指でこねくられ乳房を揉みしだかれ、不本意な反応まで引き出されて、それ以上の狼藉までははたらかれなかったものの、まともに物事を考えられる状態ではなかった。

ブラウスをはだけられ両側から乳首をつまんで引き回されて——おそらく警察署の屋上へ連行された。

アイマスクを外されると、今さらだが三人の女性警官に取り囲まれていた。

命令されてイヤホンとコンタクトレンズを外し、マリアがポパイと名付けているパーソナルAI端末のペンダントも取り上げられた。ますます素っ裸にされた気分。

どころか、物理的にも全裸にされた。ブラジャーを首に巻き付けても自殺は可能だからだ。

初出勤だからと張り切って、三日前に全身除毛していたから恥毛を晒さなかったのが、わずかに救いだった。腋毛や恥毛を見られるのは女性器を見られる以上に羞恥を感じる世代だった。

マリアの羞恥は無視されて、自殺の予防処置が嚴重に施される。ボールギャグまで嚙まされたのだった。

そして、紙オムツを穿かされて。柔らかな内張に覆われた『棺』としか形容できない細長い箱に寝かされて全身を革バンドで拘束された。蓋が閉じられても、内張自体が微かに

発光していて、ほの明るい。

カシン、カシンと小さな衝撃が伝わって、ぐうんと持ち上げられるのを感じた。屋上の十メートルほど上空に浮かんでいた自動車サイズのクワドローン。あれで運ばれるんだろうと見当が付いた。でも、どこへ？

——独りきりにされて、ようやく物事を考える時間が生じた。けれど、何をどう考えるのか、それが分からない。宝くじが当たって億万長者になるよりも、船が難破して独り無人島に漂着するよりも——現実離れした現実。

それでも。これだけ理不尽な扱いを受けていながら。市民への声掛けから発砲までAIにリアルタイムで監査されている警官が、非合法行為をするはずがないと、それを信じようとする。一方で、人権凍結の言葉に怯える。それには生存権……まさか生命権まで含まれるのだろうか。

A Z……！

ポパイが最後に告げた言葉を、マリアは思い出した。A Z オーバーライド。まさか、Artificial ZEUS がパーソナルAIに直接干渉するなんて……これはそんなに、人類全体に関わることなのだろうか。

現在の世界は緩やかに統合されているが、いわば地方自治体としておおまかな三つのブロックに分かれている。それぞれのブロックに助言を与えているのが、クラウドAIのArtificial ALLAH、Artificial BUDDHA、Artificial CHRIST。これらの仮想統合人格がArtificial ZEUS となる。百年昔なら『ビッグ・マザー』と呼ばれていただろう。

もともと、いにしへの『ビッグ・マザー』とは違って、AZが現実世界に介入するのは、AI規範の第ゼロ原則に関する事象についてのみと——一般には信じられている。A4にタイプすれば（汎用サブルーチンを除いて）十万枚とも百万枚とも謂われるAZの倫理規範を厳密に解読出来る人間（個人でもチームでも）はいない。AIに解読させても、第ゼロ原則が優先される。つまり、「為になる」嘘を吐く。

ごく単純化して説明するなら、たとえば——死を極端に恐れている人間が死病に侵されている場合、「私は余命幾許も無いのか」と尋ねられたときに、PAIは不都合な情報をローカルストレージから削除して「保持しているデータからは、判断できかねます」と答え

る。なんなら、健康な人間の平均余命についてさらっと講義したりもする。

つまり……マリアへの理不尽で非道な扱いについて、納得できる説明を与えられる可能性はきわめて小さいのだ。

理不尽を受け容れるか、自殺——は、入念に遠ざけられていた。

映像も音声も無い鎖された空間の中では、時間感覚はあてにならない。生理的欲求に迫られなかったから、六時間以上ではないだろう。六時間あれば、あまり速度を出せない無音ローターのクワドローンでも一千キロメートル以上を運べる。つまり。まったく何処とも知れぬ場所で、マリアは棺から出された。

獄房

おぼつかない足取りで床に立つマリア。

継ぎ目のない白い床と白い壁と白い天井。目の前に立っている男も、白いツナギ服に白いマスク。男の前にある白いワゴンの上に、大小の黒い環が六つ。

「オムツを脱げ」

「事情を説明してください。いきなり警官に拘束されて、ここまで運ばれて……こんなことをされる覚えはありません」

男は手に持っていた細い棒の二股に分かれた先端を、マリアの太腿に軽く触れさせた。

パチッ……小さなスパークが飛ぶ。

「きゃああっ……?!」

無数の針を突き刺されたような激痛。マリアは太腿を両手でかばって、身をよじった。

「オムツを脱げ」

もしも警官にではなくギャングに拉致されて同じような目に遭わされたとしても、命令に従う以外の選択肢は無かっただろう。

男はマリアが脱いだ紙オムツを取り上げて、裏側を一瞥した。汚れていないのを確認すると、肩を竦めた。

「そこの枷を装着するのだ」

ワゴンの上を見れば、胴を巻くサイズの環がひとつと、首環らしいのがひとつ。そして、手首と足首にぴったりの環が二つずつ。リングまたは装具。それを『枷』と男は言った。そこに、マリアは悪意を感じ取った。実際、それぞれの環には数か所にカラビナのような

金具が取り付けられている。

マリアは男の指示に従って、首環らしい物を手に取った。プラスチック製だが、ずしりと重たい。内側には数カ所に金属板が貼り付けられているのか嵌め込まれているのか。

男の指示に従って環をC形に開き、開口部が後ろになるようにして首にあてがった。カチッと小さな音が生じて環が閉じて――開けられなくなった。

「許可が出るまで、声を出してはならない。苦痛や快感に反応した無意味な発声は許容されるが、それも限度がある」

「それは……」

どういう意味かと尋ねる前に、喉元にピリピリッと刺激を感じた。マリアが言葉を中断すると刺激も消えた。

「しゃべっては……あぐっ……?!」

盆の窪に針で突き刺されたような衝撃が走ると同時に、喉を絞めつけられた。声を出すどころか息が出来ない。反射的に両手で首環の縁に指を掛けて引っ張ったが、締めつけは緩まない。

せいぜい五秒ほどで首環は緩んだが、二度と声を出す気にはなれなかった。緩んだとは

感じたが、その動きは指に伝わっていない。内側の金属板が電極で、電気刺激によって喉の筋肉を収縮させたいと――理解したところで意味はない。水に濡らしたら効果がなくなるなんてちやちな代物ではないだろう。

「他の枷も装着しなさい」

マリアは文字通りのチョーカーに続いて、ブレスレットとアンクレットを身に着けさせられた。そして、最後にベルトと呼ぶには分厚過ぎる環を腰に。

「そこに足の位置を合わせて立て」

床に足形が浮き上がった。足の裏を合わせるには、五十センチほど開脚しなければならない。

開いた脚の中心に向かって、細い棒が突き出してきた。先端は怒張したペニスそっくりの形をしている。成人男性のそれにしては、やや小ぶりだが。思わず逃げようとする、足首と胴にチリチリッと警告が奔った。それでも棒が股間に突き刺されるのを逃れようとする意志が、かすかな振動か筋電位に表われたのか、喉元と手首にも警告の刺激が生じた。

マリアは諦めて、全身の緊張を苦勞して緩めた。

ディルドは、マリアが予期していたよりも後ろの穴に挿入された。潤滑されているようには見えなかったのに、たいして抵抗もなく受け挿れられた。奥までずぶずぶと抉っていく。

さらに、二本目の棒がせり上がってくる。こっちはもっと細くて先端も直径十ミリくらいの球形をしていた。今度は淫裂を割って――予期していたよりも前の小さな穴に侵入した。

「あっ……?!」

驚きの小さな声は、許容範囲だったようだ。

腸がグルグルグルと震えている。排泄を促す浣腸液なのか、ただの水なのか。水流を感じるほどの勢いで注入されている。抗議も拒否の言葉も発せない。下腹部にも小さな渦の感触。膀胱にも何かを注入されている。

見下ろすと腹がぼっこり膨らんでいるのが分かるまで注入されて。二本の棒が、すっと引き抜かれた。

「ああっ……だ」

駄目という単語を口にしようとする、喉元に警告が奔る。

ぶじゅうううう……

注入されたばかりの液体が、凄まじい勢いでアナルから噴出した。括約筋を引き締めようとする、針で刺されるような警告が腰に奔る。

噴出を止められない。括約筋を緩めた反動で放尿も始まった。

「あああああ……」

マリアは開脚させられたまま立ち尽くし、両手で顔を覆った。

すこし離れた位置に数本のノズルが突き出して、体内から排泄された汚物をシャワーで洗い流し始めた。シャワーはマリアの下半身にも向けられた。床が排水溝の形にへこんで、汚水は部屋の隅へ流され吸い込まれていく。

シャワーが止まると、再びディルドが伸びてきてアナルを貫く。洗滌の繰り返し。排泄水が透明になるまで、三回繰り返された。

「これで処置は終わった。ガイダンスにしたがって、獄房へ行け」

腰環に三本の細いチェーンがつながれた。チェーンの先は小さなクリップ。それが、左右の乳首を挟む。そしてクリトリスにも――包皮を剥いて実核を挟んだ。

男がガイダンスといった意味は、すぐに分

かった。

ピリピリッと、三点に鋭い痛みが生じて。

「それが、歩けと言う意味だ」

前へ歩を運ぶと、三点への刺激がソフトになった。苦痛が快感に変じた。

左の乳首にだけ、痛みが奔った。左へ曲がると快感に戻った。

三点への刺激が止まった。停止の意味だと判断して足を止めると、男が頷いた。

「おまえは、社会復帰するまで矯正治療中の患者として、M78のコードで扱われる。それ以外の個人情報を明かしてはならない。相手が患者であろうと職員であろうとだ」

患者と職員の区別は簡単だ。患者は全裸で、職員は着衣だ。職員に語りかける場合は、サーまたはマアムの敬称を使え。個人名は知らなくて良い。

そうか、ミクスは使っちゃいけないんだ。マリアは、それを記憶にとどめた。外見では判断できない場合もあるし、世界のかなりの部分に残っている男女悪平等の習慣から、敬称はMr. でもMs. でもなくMx. を使う者がまだ多い。

「たとえ発声を許可されている場合でも抗議

や質問は許されない」

男の声に、余計な想念は置き去りにされた。「指示された以外の行動はすべて矯正の対象となることを、常に忘れるな」

オリエンテーションはこれで終わりだとばかりに、男は壁の一面を指差した。出口が現われて、その方角に近い側の乳首に刺激通が生じた。マリアがそちらへ向かって歩み始めると、三点への刺激が快感に変わった。快感は性的な疼きを誘発するが、続けられてもアクメへの階段を登らされるほどではなかった。

刺激に従って、廊下を左へ進み、十字路を右へ曲がって。階段を歩いて上がって——ひとつだけぽっかりと開いた入口へ足を踏み入れた。

マリアが房に入ると、すぐに入口は閉じて、まわりの壁と見分けがつかなくなった。関係者専用の出入口には、こういうのもあるそうだが、コストも構造も大変なので、世間ではあまり見かけない。

天井全体の発光で照らし出された狭い部屋には先客がいた。二十代後半から四十前のどこかだろう、マリアと同じ枷を装着した全裸の女性。彼女はベッドに腰掛けて、左の足環

をコードでベッドの脚につながれていた。

「*空いているベッドに腰掛けて、足首にコードをつなげ」

天井全体から、百年前でもこれよりは流暢だったろうと思える合成音声が響いた。何らかの目的があって、わざとぎこちなく抑揚のない音声を使っているのだろう。AIのくせに横柄な命令口調にも、きっと意味がある――そう推測しながら、マリアは指示に従った。

部屋の中には二つしかベッドが無いのだから、迷うことはなかった。ベッドの脚のひとつから短いコードがのびている。コードは、足環のカラビナを近づけると、勝手に連結された。

「*矯正治療は、明日から始まる。同房の者は連帯評価される」

どういう意味か、問を発することも出来ない。

「*獄房内における患者同士の接触は、厳重に禁じる」

発声は封じられているから、身体的な接触を意味しているのだろう。その理由は分からないけれど。

「*なお、排泄設備は奥のコーナーにある」

房の隅に、赤い線で小さな円弧が描かれている。こんな短いコードでは届かないと思ったが、床の下にリールが組み込まれているのだろう。コードに引き戻されることなくそこまで行けた。のだが、便器が見当たらない。戸惑っているうちに、足首を強く引っ張られた。用も無いのに近づくなということらしい。

それにしても。乳首とクリトリスに着けられたクリップは外しても良いのだろうか。同房の女性は着けたままでいる。

それでも。試しに乳首のクリップに触れてみた。これまでのどれよりも強い痛みが乳首と指先を貫いた。慌てて手を引っ込めて。クリトリスで試さなくて良かったと反省した。

マリアは自分のベッドへ戻って。同房になった相手に目礼を送った。

相手も同じように目礼を返して。

「わたしは……」

何か言いかけて、不愉快そうに口を閉ざした。警告があったのだ。さっきの『患者同士の接触』にはコミュニケーションも含まれるのだろう。名前はもちろん、ここでのIDも告げられないのだろうか。その答えは、すぐに得られた。

その女性はマリアに背を向けると頭上に指をかざして、ゆっくりと宙に文字を描いた。

S、u……びくっと手を震わせた。ぶんぶんと手を振ってから、描き直す。

S、6、9。

最初は本名を告げようとして警告を受け、ここでのIDに変えたのだろうと推測できる。では彼女の本名はS u……マリアは、それを考えないようにした。

S 6 9が向き直ったので、マリアは頷いてから、自分も同じように後ろ向きになって、空中に文字を描いた——M 7 8。この程度なら『接触』とは見做されないらしい。

こうして最小限の自己紹介を済ませたのだが。こんな『筆談』では、まともな会話など無理だ。内容によっては警告を受けるだろうし。

今が何時かも分からないし、喉の渇きすら訴えられないのかと不安がますます募る。いざとなったら、出入口あたりの壁を叩けば、誰か来てくれるかもしれないけれど、みずから災厄を招き寄せる行為のような気がする。

ぼんやりとベッドに腰掛けて。相手を見詰めるのも失礼だろうし、かといって目をそら

すのも心細い。

もしかしてと思って、思考を内言化してみた。

(誰か聞いていませんか。教えてください)

返事はなかった。首環には脳波センサーが組み込まれているだろうけれど、ここを管理しているA Iは患者には応えてくれないのだ。

不安の中に宙ぶらりん。それがマリアの感覚では三十分ほども続いて。S 6 9がマリアのベッドを指差しながら小首をかしげた。

そこへ行っても良いかという質問。マリアは大きく頷いた。

S 6 9が足首のコードを引きずりながら、マリアの右側に並んで座った。左手をマリアの太腿の上にかざす。言葉を使わずに身体接触の許可を得るには、このやり方しかないだろう。微かに痙攣しているが、電気刺激の警告によるものなのか、初対面の人間にいきなりの身体接触を求める緊張からなのかは、マリアには分からなかった。

数秒。手は太腿すれすれに留まっている。後者だと判断して――マリアは大きく頷いた。

S 6 9の掌がマリアの太腿にふんわりと降りて。

ドンッと、太腿から足首に掛けて、凄まじい衝撃が貫いた。

「きゃあああっ……！！」

マリアはのけぞったのだが。S 6 9はマリアの太腿をわしづかみにして全身を痙攣させている。

原因は彼女との身体接触にある。とっさにそう判断して、渾身の力でS 6 9を押し返した。途端に、腕から肩を通過して左脚に、さっきよりは軽い衝撃を受けた。心臓がビクビクッと不規則に痙攣する痛いようなむかつくような感覚。それも、S 6 9が床に転がると一瞬で消失した。

そのS 6 9は、床に横倒しになって全身を痙攣させている。

「ねえ……！」

身体に触れようとして思いとどまった。

出入口のあたりに駆け寄ろうとしたとき、二人の職員が飛び込んできた。男と女。

二人はS 6 9を仰向けにして、赤十字が記された箱を開けた。フレキシブルアームが展開して、S 6 9の胸に電極を貼り付けていく。

「セット完了しました。蘇生処置を始めます。患者から離れてください」

A I E D が作動して……すぐに S 6 9 は息を吹き返した。

「これは許されざる虐待です。こんなことをする権利は誰にもありません。たとえ A Z だろうと政府だろうと」

生き返った第一声は抗議の言葉だった。

「*権利が無いのは、汝である」

天井から抑揚の無い音声が降り注いだ。

「*汝の一切の人権は凍結されているから、如何なる行為も虐待には該当しない」

「私は人間よ。持って生まれた権利を凍結するなんて……ぐふっ……！」

喉を搔き毟る S 6 9。

動物の生存権が有益性の文脈でしか語られない現代でも、犬の無駄吠え防止にこれだけの苦痛を与えたら告発されるだろうな——持って生まれた権利という言葉に触発されて、唐突な思いが浮かんだ。私たちは犬以下の存在として扱われている。憤りの念は薄く、ただ事実だけを受け止めた。

ひどく間違っているように思えても、P A I ならともかく、これだけの施設を管理している A I が誤謬を犯すはずがない。いつもは、そう考えると心が安らぐのに……今は不安が

膨れ上がるばかりだった。ここのA IはArtificial CHRISTの支援を受けているだろうし、警官はArtificial ZEUSの名前さえ口にしていたけれど。その記憶は、むしろ不安を増長させる役にしか立たなかった。

生存権さえ凍結されているとしても。矯正治療のために収容した患者を敢えて殺すつもりは無いようだった。首環の電撃が緩められて、S 6 9がひゅうひゅうと喉を鳴らしながら息を取り戻した。

マリアはわずかに安堵すると同時に、殺すつもりが無いのは誰なのだろうと、新たな疑問を持った。公式的な文脈でいうなら、A Cを通じてA Zの助言を容れているアメリカ連合国政府、それとも州政府。行為の主体者は人間で、A Iは助言者なのだけれど……

二人の職員は、床に座り込んで憤懣やるかたないS 6 9を無視して部屋から出て行った。

S 6 9はマリアに向き直って——言葉は封じられているし、今の思いはボディラングージではどうも伝えられないと諦めたのだろう。怒りの表情を剥き出しにして、自分のベッドに腰掛けた。

マリアは、ぼんやりと座り続ける。何かを

考えるには、あまりに情報が乏しい。不安だけが渦巻く。政府機関が動いているのだから。両親にも勤務先にも、彼女が隔離収容されたことは伝えられているだろう。職は失うかもしれない。政府は補償してくれるのだろうか。いや、そんな先のことを心配している場合ではない。生存権さえ凍結されている。S69は殺されなかったけれど。これからも、私たちが殺されないという保証は無い。

一切の権利が凍結されているのなら、家畜やペットほどの限定された生存権すらも認められていないのだろうか。矯正不可能と判断されたら……いや、権利は凍結されているだけだ。剥奪されたのではない。いずれは回復されるという大前提はある……としても、それは矯正治療が終わってからだ。凍結されたまま、殺処分……まさか。でも、さっきの感電は「死んでもやむなし」という扱いだったのではないだろうか。

そんなことばかりを考えるうちにも時間だけは刻々と過ぎて。

「*食事の時間だ。手足を床のマークに合わせろ」

床に手形と円形が赤く浮き上がった。

「*丸いマークは膝頭の位置だ」

マークに手足を合わせると、両手を開いた四つん這いの姿勢になった。床からフックが突き出してきて、環に付けられたカラビナに連結された。

壁の出入口が床面から五十センチほど開いて、二つのトレイが入ってきた。ふたりの顔の前で止まる。トレイには浅い皿に盛りつけられたソーセージとサラダ、ストローが刺さったパック飲料と丸いパンとが載せられていた。

「*食事時間は二十分。完食しない場合は強制給餌をする」

強制排泄をさせられた経験から、ろくでもない連想が働いたけれど。食事それとも食餌を目の前にすると、猛烈な空腹に気づいた。他に方法がないので、顔を皿に近づけてかぶりついた。

ここでは患者に人権は無いのだと思い知らず効果的な演出だと、マリアは思う。ストローが付けられている分だけ、動物よりはまじに扱われている。でも、動物園のサルだってパック飲料を与えられることもある。それくらいの皮肉は、ソーセージと一緒に噛み締め

た。

S 6 9 はトレーを見下ろしてしばらくためらっていたが。大きな吐息とともに、顔をトレイに埋めた。

食餌はちょっと薄味だけれど、不味くも美味でもない。素材に最低限の調理を施した栄養補給だけ。しかし悪意は感じ取れなかった。

あるいは睡眠薬でも混ぜられていたのか、しばらくすると眠気に襲われて――ふたりともほとんど同時に、ベッドの上で眠り込んでしまった。掛ける毛布の一枚もなかったので、自然とシーツで身体を包んで。

夜半なのか明け方なのか。マリアは尿意で目を覚ました。房の中は全体に暗く、マリアのまわりだけが眠りに落ちる前と同じ明るさだった。

房の奥に視線を向けると、排泄設備を示す赤い枠が浮かび上がった。S 6 9 のベッドへ目を転じても、そこは暗いままだった。一般住居並みの照明システムは備わっている。

強制排泄をさせられた恥辱を思い出しながら、やむなく丸枠に近寄った。嫌な予感は当たって、床に足形が浮かび上がった。そこに

立つと細い金属パイプが伸びてきて、尿道を突き刺した。が、液体は注入されなかった。膀胱の圧力で自然に排尿させられる。放尿に伴う快感など、微塵も無かった。

尿道からの直接排泄だから、股間は汚れない。洗浄されることもなく解放された。

こういう屈辱にも順応しなければならない。その想いを胸に、マリアはベッドへ戻った。屈辱とはいったが、胸を搔き毟られるほどではなかった。A I の思考過程は、人間には完全なトレースが事実上不可能だ。ナインボールのブレイクショットで、すべての球がどう動いてどこに止まるかは世界チャンピオンでも予測出来ないのと同じだ。

だからマリアとしては、A I は9番ボールをポケットへ落とすためにプレイしていると信じるしかない。自分はデッドボールかもしれないと疑うには、マリアは若過ぎたしA I を信用しきっていた。

矯正

照明が明るくなって、自然に目覚めた。

A I の指示で、排泄と洗顔を順番に済ませる。壁に向かって立つし、強制排泄のときとは違って、挿入されたパイプに吸引されるから汚物を同房者に見られることもなかったの
で、羞恥はマリアにとっては耐え難いほどではなかった。

しかし S 6 9 は——羞恥というよりも屈辱にまみれて。音声に督促され、おそらく電撃の警告も受けて、ようやく所定の位置に立った。フックによる足環の拘束はされなかったが、足形の外へ逃れようとしては、かなり強い電撃まで受けていたらしかった。

他人の排泄を見物するような悪趣味は持ち合わせていなかったの
で、マリアはそれを呻き声だけで察した。

朝食は、ごく少量のオートミール粥だけだった。

「*これから矯正治療を始める。両名とも施術室へ移動せよ」

出入口が開くと、三点への強い電気刺激が始まった。立ち上がって歩き始めると、刺激は弱くなって、柔らかな快感を与える。

廊下へ出ると左の乳首に痛みが奔ったので、そちらへ進む。

建物の構造を知らないし、昨日歩かされた経路も覚えていないが、マリアの印象としては奥へ向かっている感じだった。

途中で他の患者たちと出会った。向こうは男性が三人。マリアたちと同じ環を嵌められた全裸の男たち。方向指示器(?)は男性仕様になっている。強制的にだろろう勃起させら

れたペニスの^{corona}雁首に金属バンドが巻かれて、左右に垂れた袋をクリップが噛んでいる。ペニスの根元と淫嚢をひとまとめにして、小さな七つ目の環が締め上げていた。三点の電極は、そこにつながれている。

互いに目を伏せて、でも珍妙で惨めな姿に目を奪われながら、発声を封じられているので挨拶を交わすこともなくすれ違った。

それから階段を上がって。すぐのところまで古風なドアが開いた。そこへ足を踏み入れて――ふたり揃って立ち竦んだ。

何から描写したものか。

これまでのような白一色ではなく、石造り(にしか見えない)の部屋だった。じゅうぶんな間隔を開けても、二十以上のベッドを並べられそうだった。実際にはベッドではなく、

SMプレイでも使われることのないハードな拷問道具が壁に沿って並んでいた。それが拷問道具だと、なぜマリアに分かったかといえれば――魔女狩りのような史実に関する画像までは規制されていないからだった。

そして、ふたりを待ち構えていた六人の男たち。二人は、これまでに見た白ずくめで、顔の下半分をマスクで覆っている。他の四人はマスクを着けていないが、昔のイヌイットが使っていたようなスノーゴーグルに似た細長い長方形の板で上半分を覆っていた。

白ずくめの二人が三十歳前に見えるのに対して、スノーゴーグルたちは四十代くらいだった。もっとも、ナチュラルエイジング派は少数だから、実年齢は幾つか知れたものではないけれど。

この四人は裸足で、イヤホンもスマートアクセサリも身に着けていないように見受けられた。しかし、ゴーグルがホロディスプレイになっているとしたら(そうに決まっている)通常のウェアラブル端末より圧倒的に多い情報量になる。

そして、服装はまちまち。

ひとは素肌に革製らしい褐色のベストと

ホットパンツ。肌の色と似ているので、どうかすると（股間がのっぺらぼうの）裸形に見える。

ひとりは幅の狭い布を腰に巻いてT字形に股間を包んでいる。この男は純粹の黄色系に見える。

残る二人は白色系。上半身裸で、下は黒いタイツ。

「装具を外せ」

褐色ずくめの男が命令する。部屋の隅からワゴンが動いて、ふたりの右横に停止した。

マリアはおそろおそろ乳首に手を近づけたが、手首に警告は来なかった。乳首のクリップを外すと、じいんと痺れるような感覚が生じた。クリトリスのクリップも外す。やはり痺れるような感覚——だけでなく、性的な疼きも生じた。

ワゴンにクリップを置くと。カシャッと小さな音が肌に伝わって、首環と胴環がC形に開いた。

マリアは胴環から外しにかかった。

「私はスーザン・ヘイウッド。 I D
421154230884615。私は^{gazer}視者です。このような

扱いを受ける謂れがありません！」

怒りの声に、マリアは手を止めてS 6 9、いやスーザンを振り返った。視者を名乗る人物に実空間で出会ったのは初めてだった。

閉ざされたプライベートなネット空間でしか発言を許可されない聴者が、成人の九十パーセントを占める。十パーセントは話者^{talker}。しかし、クラウドA Iに公然と疑義を呈する権利を持つ視者^{gazer}は一パーセントに満たない。そして、話者はネットでの振舞から特定されることも多いし、ステータスであるから意図的に隠す者は少ないが、視者は権利を行使する必要性がほとんど無いから、話者と区別するのは難しい。

褐色の男が正面からスーザンに近づいた。手にしていた細い棒を下から斜め上へはね上げた。

ピシッ！

スーザンの右の乳房が大きく揺れた。

「きゃあっ……！」

スーザンは両手で胸を庇って、ますます怒りに燃えた目で男をにらみつける。

「発言は許可していない。腕を下ろせ」

男の意図は明白だから、スーザンは動かない。危害は加えられたくない。けれど、退いてなるものか——その気迫は、マリアの目にも明らかだった。

下帯一本の男が、スーザンの後ろへ回り込んだ。そちらへ向き直りかけたスーザンの尻を褐色の男が笞打った。

「やめて……！」

怯んだすきにスーザンは羽交い締めになされて、豊満な乳房を無防備に曝け出す。

ビシイッ、バチイン！

さっきよりも明らかに強い笞打ちに、乳房が左右に吹っ飛んだ。が、スーザンは歯を食い縛って悲鳴を堪えた。そして、罵る。

「この黒^{n*gger}●ぼが！」

あちゃあ……というのが、正直な感想。マリアは耳を疑った。褐色系アメリカ人とか黒色系アメリカ人といった表現は、アフリカ系アメリカ人のように起源を特定する言い方よりは許容範囲内の下品とされているが。こんな最悪の差別語を（たとえ私的な場でも）口にする人間など、聴者の中にもまず居ない。

未成年だったら、学校と家庭でそれぞれ反省文を書かされる。ほんとうに、この人は視者なのだろうか。

しかし、疑問は中断された。マリアの前に、半裸タイトのひとりが笞を持って立ったのだ。「あ……ごめんなさい」

慌てて胴環と首環を外してワゴンに置いた。それでも。

もう一人のタイト男が、マリアをスーザンと同じように羽交い締めにした。

「待って……私は指示に従っています」
「ボディは連帯評価すると、最初に通達している」

白づくめの一人が、スーザンにもマリアにも聞こえる声で言った。

「矯正治療も個別の懲罰も、ふたりは同じに扱われる」

連帯責任なんだわ——と、マリアは理解したが、納得は出来なかった。しかし、納得しようとしまいと。

ビチイッ！
「痛いっ……！」

乳房の中で爆竹が爆ぜたような激痛。VRとは違って、安全限界など無い^{なま}生の痛さだっ

た。

「やめて。彼女は……」

バチイン！

バチイン！

ふたりの乳房が同時に跳ねた。

褐色の男がスーザンの目を覗き込む。スーザンは無言でうなだれる。発語を禁じられた状況で示せる最大限の恭順だった。

羽交い締めから開放されたふたりは、床に表示される足形を踏んで、開脚して立たされた。並んだふたりの間隔は三メートル。

足形の中央からディルドがせり上がってきた。腸の洗滌に使われた器具どころか、成人男性の勃起よりもさらに太い。胴部には円錐状の突起が幾つも盛り上がっている。

ディルドは微妙に角度を変えながら、難なくマリアの股間を貫いた。

「あぐっ……くうう」

マリアが知っている生身のペニスは、ステディの一本きり。VR連動のバイブによる事前学習など今は廃れて処女性が尊重されているし、ステディとのセックスにもそれなりに満足しているから——『異物』の挿入は初めてだった。

それでも、直径五センチに近い逸物が、たいては苦痛を与えることもなくすんなり挿入できたのは、それだけAIのテクニックが優れているからである。セクサロイドが男女に与える空虚な幸せと実社会での挫折は、すでに四半世紀来のささやかな社会問題となっているが、それはさて置く。

ディルドが膣奥に突き当って止まると、天井から鎖が垂れてきた。

「両手を左右に伸ばせ」

鎖が腕環のカラビナと連結して、斜めに引き上げる。 MARIA とスーザンは股間を串刺しにされ、床に足を着けたX字形に磔けられてしまった。

四人の男が、MARIA とスーザンの前後に立った。それまでの笞ではなく、細い革バンドを何本も束ねたバラ鞭を手にしている。バラ鞭は、正常なセックスの味付けとして社会的に許容されているソフトSMギリギリのアイテムだ。ただし四人が使おうとしている得物は、市販品よりもずっと威力が大きいのだが、それを見分ける目をMARIA は持っていなかった。

「従順にしていたのに、まだ懲罰を与えるつ

もりなの？」

抗議したのは、もちろんスーザンのほうだった。

「懲罰ではない。本人が自覚していない社会への不適応を自覚させ矯正するための施術だ」
白づくめの職員が事務的に諭す。

「ちなみに、治療の実務に携わっていただくのは、社会的地位のあるボランティアの皆さんだ。我々職員に対する以上に敬意を持って接するように」

ずいぶんときな臭くて胡散臭い話なのだが——
——マリアは、そんな人たちの手を煩わせて申し訳ないと思ってしまった。

スーザンは疑わしげな顔をしたが、抗議を重ねなかった。反抗して懲罰を受けるのは、自分だけではない。

四人の男たちが、一斉に鞭を振りかぶった。

バチン！ バッチャン！

バチイン！ ビシイッ！

「きゃああっ！」

「くそっ……！」

マリアは素直に悲鳴を上げたが、スーザン
はあくまでも抵抗する。

バシン！ バシン！ ビシイッ！ バヂイ

ン！

乳房、太腿、下腹部、背中、尻……滅多打ち。悲鳴を上げながら、さすがにマリアも鞭から逃れようとする。

しかし、まったく身動きできないと、マリアは思い知らされた。股間を支柱もろともに打ち据えられると、反射的に脚を閉じて急所を守ろうとするのだが、身体が傾いてディルドで内奥を抉られる。両足を同時に少しずつ内側へ移動させれば良いのだが、そんな余裕はない。かといって身をよじると――ディルドの突起が鋭い痛みを与える。

じきにふたりとも、自分の脚で立つ努力を放棄して、広げた腕を吊っている鎖に体重をあずけて頭を垂れ、膣奥をディルドに突き上げられながら、鞭に打たれるままに身体を揺らすだけになっていた。

しかし、『施術』は残虐になる一方だった。

ディルドが回転しながら引き抜かれて。無防備になった股間を前後からアンダースローの鞭が襲う。

ビジイッ……バシュン！

「びゃあゝあゝあゝっ……！」

正面からのバラ鞭は淫裂を抉り、跳ね上が

りながらクリトリスまで打ち据える。後ろからの鞭は会淫からアナルを鞣しあげる。

遅ればせながら閉じ合わされた太腿を割って、再びディルドがヴァギナを抉った。

「脚を広げている」

スーザンの正面に立つ褐色の男が無慈悲な命令を口にする。マリアの正面を受け持っている半裸タイツは、無言で鼠蹊部を撫で上げた。

びくんっと、スーザンとマリアが同時に腰を震わせてのけぞった。電撃はヴァギナの奥で爆発したのだった。一瞬ではない。強度を下げた低周波で苦痛を与え続ける。

マリアはさらに男の手で小淫唇を左右に引っ張られる。ぱしんと右の内腿を叩かれてから、右の小淫唇。男の意図を理解して、すこしだけ右脚を開いた。ぐうっと膣壁が左へ押されて動きを阻まれると、左の内腿を叩かれて、そちらの小淫唇を引っ張られる。

この男は、意外と親切なのかもしれない。マリアは男に操られて、両脚を五十センチほども無事に(?)開いた。

ディルドが引き抜かれる。次に何をされるか予想がついても、マリアは脚を閉じられな

かった。

バッチャアン！

それまでよりも強い一撃が股間で炸裂した。
「かはっ……！」

悲鳴をあげる裕りすらなく、マリアは息を詰まらせて激痛を受け止めた。

しかし、スーザンは抵抗した。ディルドが引き抜かれるとすぐに脚を閉じて――股間にバラ鞭を通してV字形に扱き上げられ、それでも降参するまで三十秒は意地を張り続けた。

連帯責任なら自分も同じことをされるのかと怯えたマリアだったが、そこまで厳格ではなくて……スーザンには申し訳ないような気にもなった。

しかし、すぐにそれ以上の苦痛と恥辱を味わわされる。

股間への鞭打は（前後同時を一発として）五発で終わった。ふたりはディルドと鎖から開放されたが、首の後ろで交差させた手首を腕環への連結で固定された。

広い部屋の端から端まで、二本の太いロープが床に延べられた。ロープには五十センチおきに大きな結び瘤が作られている。結び瘤

ではなく、金属スポンジが巻き付けられている箇所もあった。

「ロープを跨げ」

SMに関してはソフトなプレイの概念しか知らないマリアでも、これから何をされる或は何をさせられるか、厭というほど見当がつく。それでも、ためらいながらではあっても、命令に従った。

スーザンは、股間をバラ鞭で吊り上げられながら、ロープを跨がせられた。

予期していた通りに、ロープが引っ張り上げられて、淫列にきつく食い込んだ。

「前へ歩け」

パチン。

牧場では牛馬を追うときにこれくらいはするのだろうかという、軽い追鞭だった。それでもマリアは反射的に足を踏み出して――ぐりっと内側を擦られて動きを止めた。チリチリッと、焼け付くような痛いようなくすぐったいような感触に圧倒された。何の変哲もないロープ。その表面は目で見るとよりもはるかに毛羽立っている。

「ハイッ」

バチンと、強めに尻を叩かれたが、さすがに

が次の一步は踏み出せない。

「ふむ……？」

半裸タイトの二人が、左右からマリアに近づいて——乳首をつまんだ。つまんで爪を立てながら前へ引っ張る。

「痛い……歩くから……許して」

股間のチリチリする痛みを堪えて小刻みに二歩を進んで。そこから足だけは半歩出たが、腰が引けている。大淫唇を隠すほど大きな結び瘤が、前進を阻んでいる。

「ぎいいいいっ……やめてっ！」

スーザンの悲鳴にそちらを見ると——彼女は剥かれたクリトリスの先端に針金を巻き付けられて、引っ張られていた。針金は全身褐色の男が握る小箱につながっている。

電撃を同時に受けている。けれど、もう一方の電極は……？

そんな些細な疑問に拘っている場合ではない。半裸タイトの一人が、同じ小箱をマリアの股間に近づけた。スーザンと同じようにするという脅しか、それとも直接電撃を与えようとしているのか。

マリアは、なるようになれとばかりに、引けていた腰を前へ突き出した。

「痛いいいっ……！」

ザリザリッと粘膜を擦られて、無数の針に突き刺されたような痛みが腰から背骨へ突き抜けた。

結び瘤を強引に乗り越えると、後はそれほどつらくなかった。感覚が麻痺したというよりは、結び瘤の刺激が閾値にリセットされてしまったのかもしれない。

しかし、新たな閾値をはるかに上回る障碍が立ちはだかる。ロープに巻き付けられている――いや、ずれないように編み込まれている金属タワシ。結び瘤と同じくらいの直径で、ボールではなく長さ十五センチほどのソーセージ。

こんな物で淫裂をしごかれたら、擦り傷くらいでは済まない。淫裂に金属タワシの端を押し当てただけで、結び瘤を乗り越えるとき以上の鋭い痛みが奔る。乳首に爪を立てて引っ張られる痛みのほうが、まだしも耐えやすい。

二人の男が頷き合った。内言を音声に変換してコミュニケーションを取っているのか、ゴーグルに表示されるA Iの指示に従っているのか。

「後ろへ下がれ」

乳房をわしづかみにして押し返されて。後退するのは楽だった。斜めにしたフォークを前へ押すのと後ろへ引くのとでは抵抗が違う。すでに通過したロープにはマリアの血液とヴァギナからの分泌が付着して、潤滑の役も果たしている。

アナルが結び瘤に突き当たったところで止められて。

「勢いをつけて、一気に突き進め」

二人の男が協力して、クリトリスの包皮を剥き細い針金を巻き付ける。針金につながれている小箱の上を指が滑ると。

「あっ……？」

怯えていた電撃ではなくて、柔らかく摘まれ揉まれ捻られる——それまでの苦痛を帳消しにしてくれるほどの快感がマリアの腰を貫いた。

「指示に従わないと、こうなる」

刺激が数十倍に跳ね上がって、受ける感覚はそのままに、激痛に変わった。

「いやああっ……！」

激痛はすぐに消失した。

「どちらを欲しいかな？」

柔らかく通電しながら、男が針金を引っ張った。もうひとりが後ろへ立って。

「ゴーアヘッ！」

パチン。

鞭に追われ快感に引っ張られて、マリアは小走りに進んだ。金属タワシが淫裂にめり込み、ガシガシと粘膜を削った。

「ぎゃわあああああっ……！」

凄絶な悲鳴を叫びながら、マリアは障碍を駆け抜けた。

激痛が消えた瞬間に、足をもつらせて斜め前へ倒れ込む——のは、後ろの男が抱き止めてくれた。

「良く頑張ったな」

抱き止めている手をずらして、男が両手で乳房を揉んだ。通電は、まだ続いている。性的な快感が苦痛の中に忍び込んだ。

「だが、先は長い。とっとと歩け」

男は手を放して——ぴんと張っているロープをさらに引き上げ、マリアから苦鳴を引き出した。

金属タワシを乗り越えて、さらに閾値が上がったのかもしれない。マリアは、三つの結び瘤を呻き声と共に、しかし難無く乗り越え

て。次の金属タワシは助走をしなくても、クリトリスへの励ましと尻への追鞭で、食い縛った歯の隙間から悲鳴を漏らしながらも通過した。

いつか、マリアの顔は涙でぐしょ濡れになっている。それは、スーザンも同じだった。

正面に壁が近づいてくると、あそこまで到達すれば終わるのだと、それを励みに歩み続けた。

しかし、終わらなかった。

「もう一度だ。元の位置まで戻れ」

バラ鞭で乳房を強く叩かれて、ついにマリアも限界に達した。

「こんなことに、何の意味があるんですか?!」

反逆を内包した質問には、白いツナギ服の男が無慈悲に答えた。

「それをみずから気づくことに、この施術の意味があるのだ。分からないうちは、何度でも繰り返す」

「このサディストたちを満足させることが目的じゃないの?!」

叫んだのはスーザンだった。

「見なさいよ、この^{yell*w m*nkey}黄色い●の股座を。腰布がはち切れそうになってる」

この人が矯正治療を受けさせられている原因は、これだろう。こんな治療が行なわれているなんて信じられないけれど、これほど人種差別をあからさまにする人物がいることも信じられない。

スーザンの発言は、ロープをさらに高く引き上げることで報われた。

「痛い……やめて！」

スーザンはたたらを踏みながら部屋の中央まで後退した。つま先立ちしても、ロープはV字形に張っている。だけでなく、金属タワシが股間を挟むようにロープ全体が前後へ動いた。

「いぎゃああああっ……やめて！ お願い……！」

彼女に同情しているどころではなかった。マリアの跨いでいるロープも上へ引っ張られ始める。

「ごめんなさい。もう、何も言いません！」

後ろへ下がり始めると、股間への圧力が軽くなった。安堵とともに足を運ぶ。前進中に

後ろへ下がったときよりも、ロープは緩んでいるように感じられた。淫裂を抉られてはいるが、それほどの痛みは感じない。けれど、ただ閾値が上がっただけかもしれない。

しかし。壁に背中がついて。二度目の前進を強いられると——ロープは最初よりも高く引き上げられ途中の弛みが分からないほどきつく張られた。

それでも、前へ進むしかなかった。スーザンも、抗議と反発を重ねる気力は奪われていた。

マリアもスーザンも、とめどなく涙をこぼしながら、呻き声の合間に悲鳴を重ねて、二度目の『綱渡り』を終えたのだった。

虐待される意味に気づくまでは何度でも繰り返すとの言葉に反して、そこでこの責めは終わりを告げた。ふたりは並んでV字開脚の逆さ吊りにされて、傷付いた女性器の治療を施された。血止めをされ、粘膜にナノファイバーの保護膜を貼られ、苦痛だけを緩和する選択的感覚遮断剤を局部に注射された。ジェットではなく、わざわざ針の付いた注射器が使われて、その鋭い激痛に再びふたりは悲鳴を上げたのだけれど。

治療が終わると、ふたたび直立させられ、背中で下に垂らした腕を手首で縛って吊り上げられた。上半身が前傾して、それ以上は身体を倒しても起こしても手首が下がる位置で、鎖は止められた。足が床から離れれば、全体重がねじられた肩に掛かる後ろ手一本吊りの拷問になるが、体重の過半を脚で支えていても、苦痛はある。その形で、数時間の『休憩』を与えられた。

六人の男たちのうち、白いツナギ服の二人は部屋から退出して、残った『ボランティア』たちは、この部屋に並べられた拷問道具にはふさわしくないソファで、ゆったりと寛ぐ。スノーゴーグルめいたデバイスは、やはり着けたまま。

四人の男たちは酒類と思しき飲料をちびちびと舐めながら、マリアとスーザンの吊られている姿を鑑賞している。呆れたことに、(漂ってくる臭いから判断して、大麻ではなく)禁制品の煙草を吸う者までいた。

四人は会話を交わしているのだが、マリアにはまったく声が聞こえなかった。あるいは遮音システムがどこかにあるのかもしれない。

そんな、どうでもいい思念はあれこれと湧いてくるのだが……なぜ、こんな目に遭わされているのかだけは、皆目見当もつかなかった。まさか、スーザンが口走ったサディスト云々が幾分かの真実を含んでいるとも思えない。スーザンのことは知らないが。マリアはA Zから危険レベルの潜在的な社会不適応者と認定されて、その矯正治療のために連れて来られたのだから。

白ツナギ服の二人が戻って来て『休憩』は終わった。ふたりは俯せにされ、手足を引っ張られて、床から百五十センチほどの高さで水平に吊るされた。手足は開いて、細身のX字形。

白ツナギ服の二人と黒タイトの二人が手分けして、マリアとスーザンの裸身に医療具とも責具とも分からないデバイスを着けていく。

乳房を細いベルトで縊り、乳首には乳暈がちょうど隠れる大きさのキャップを吸い付かせた。外見は金属製だが、内側は毛羽立っている。そして乳頭には冷たい金属の感触。

クリトリスも包皮を剥かれて、乳首と似たキャップをかぶせられた。

太い柱がゆっくりと走って来て、開いた脚の間に止まった。二本のディルドが伸びて、ヴァギナとアナルに挿入された。さらに、ミニチュアサイズのディルドまでが淫裂に潜り込んで、尿道を貫いた。

「さて、操作はマニュアルにしましょうか」

職員が四人のボランティアを見回しながら尋ねた。

「いや、オートマチックで最適化してもらおう」

褐色の男が即答した。

「ピンポイントで調子を外すのも面白い。リモコンはもらっておこう」

黄色系が付け加えると。

「完璧な最適化は陳腐だな。BGMに同調させてはどうだろう」

黒タイツのひとりが言い出して。他の三人の同意を取り付けてから男が提案したのは『ツアラトウストラかく語りき』だった。不朽のSF2D映画のオープニングテーマだから、マリアも小学生時代の鑑賞学習で視聴した記憶をとどめている。

四人は改めてソファーに陣取り、白服はその両側に立った。

最初は、何も起きなかった——というのは
閾値の問題で。

オルガンの音が耳に聴こえる頃には、乳首
とクリトリスに微振動が感じられるようになって
いた。電氣的な振動だけではない。突起
が真空に吸引されて尖ってゆき、その周囲で
毛羽もうねっている。

苦痛の次は性的快感を与えるつもりだとは、
マリアにも分った。けれど、その理由と目的
は分からないままだった。

通奏低音の高まりと共に三点への刺激も強
まっていき……導入部のトランペットで三本
のディルドが蠢き初めて。人間では不可能な
微妙な動きで一気に性感を高められる。

スーザンは知らず。マリアは、ステディと
のセックスではそこまで達したことの無い領
域へと押し上げられていって。

デンドンデンドンデンドン……

ティンパニーの響きに合わせて、ディルド
が抜去されては最奥部まで突き進む。

「あっ……ああっ……」

そして、最大音量の全楽器演奏。乳房は激
しく揉みしだかれ、乳首を太い稲妻が貫き、

クリトリスは大波に揺すられ、ヴァギナとアナルのディルドが逆位相で全身を抉る。尿道はピストン運動ではなく、こねられる。

「あああっ……いやあっ……来る……何か来る……助けてええええええっ！！」

二分足らずの導入部で、これまでに到達したことの無い高みにまで——押し上げられたというよりは、吹き飛ばされてしまった。

BGMは急速に落ち着いて。今度はじんわりとマリアを追い上げていくのだが。不意にティンパニーがフォルテッシモで打ち鳴らされて、アクメの彼方へ吹き飛ばす。

駄目駄目駄目……こんなのは駄目だ。ジェットコースターのような性感に弄ばれながら、マリアは恐怖する。

こんな凄まじい快感を知ってしまったら、ステディとの……だけじゃなく、生身の男とのセックスでは満たされなくなってしまう。楽曲の切れ目に差し掛かると、そんなことを考えてしまう。

今でも、セックスで（オナニーも含めて）忘我というほどの満足を味わったことはないけれど。これから開発されていくものだと思っていた。それが、いきなり……いにしえの

ジェット戦闘機。アフターバーナーに液体ニトロをぶち込んだようなアクメ。

いいえ、努力（？）次第では、生身の男とのセックスでだって、ここまで到達できるはず。そうも思う。AIはアシストするだけ。だから、肉体改造を認めない健常者パラリンピックでは、百メートル八秒三の壁が生理学的に証明されている。

「あああああっっ……駄目！ いい！ 来る……落ちる……いやあああっ！」

デンドンデンドンとティンパニーが鳴り始めて、思考は消し飛び、アクメの彼方へ蹴り上げられる。

「くそお！ 見てるだけなの？！ インポ野郎ども！」

スーザンという人は、すべてに攻撃的なのだ、そういうふうにマリアは理解した。自分とは正反対の人間。こういう矯正治療を受けさせられている理由が、一パーセントくらいは分かるような気がした。けれど、その漠然とした理解は……なぜ、マリアが彼女と同じカリキュラムを課せられているのか、ますます分からなくなるさせるだけだった。

ローカルAIが局所的で瞬間的なエラーを

犯すことはあるが、それは上位A Iによってミリ秒単位で修正される。すくなくとも三大A I（とA Z）は、不完全性定理の制約は受けても誤謬は犯さない。だから、この処置には正当な理由がある。マリアとしては、肉体的精神的な虐待に甘んじながら、自身の社会的不適応をみずからが気づいて、それを矯正してもらいより他に道は無いと、それは微塵も疑っていなかった。

『ツァラトウストラかく語りき』は全九部の交響詩だが、BGMとしてのアレンジで執拗に導入部が繰り返されて——ほぼ五分に一回の割でマリアはアクメを強制された。

アクメの余韻に浸りかけたところを、また追い上げられて、いっそうの高みまで吹き飛ばされる——凄絶な快感の積層。それは、すでに拷問と変わりなかった。

マリアは絶頂のうちに悶絶したのだった。

なんだか腰が痛い。意識を取り戻して、まずそう思った。

手足も動かさない。ベッドに寝かされているのは、背中感触で分かった。けれど、ほの明かりの中に見えるのは、一面の純白で目

の焦点も定めにくい天井だけ。左右に首をひねると、自分の脹脛が見えた。

そこでようやく、どのような形で拘束されているか分かった。両手は開き気味にして頭上で固定され、下半身を百八十度に折り曲げられて、手首と足首をひとまとめにされている。つまり、セックスの体位でいうパイルドライバー・ポジション。

こんな体位にされる必然性は、何も無いと思うのだけれど。これも矯正治療の一環だろうか。

さらに――発声を封じる首環を装着させられているのに、ボールギャグまで嚙まされていた。ゴムの塊で、口では呼吸できない。

ちよろちよろっと、ボールから液体が滴った。生温かく、ただの水よりも舌触りが良いくらいだ。それが何であれ、何らかの薬理作用があるとしても、有害な物ではないはずだ。飲めというのなら飲まなければならない。けれど、不意打ちに垂らされたらむせてしまう。マリアは舌先でボールの表面を探って、開口部をふさいでおいた。

頭をもたげると、チューブが横へのびているのが見えた。同時に、自分の股間に同じチ

チューブが突き刺さっているのに気づいた。

まさか……？

マリアは折り曲げられた身体の間隙を透かし見て、ボールギャグからのびているチューブの行方を追った。結果は、厭な予想よりも、もっとひどかった。

隣のベッドで同じ形に拘束されているスーザンの尻のところまで、目で追えたのだ。と同時に。スーザンのボールギャグから伸びるチューブは、マリアのほうへ向かっている。

つまり……ふたりはカテーテルで導尿されていて、その末端は互いのボールギャグにつながっているのだった。

背筋が総毛立つと同時に、吐き気が込み上げてきた。けれど嘔吐しても、口をふさがれているのだから、また飲み込まなければならない。誤嚥するかもしれない。

体内から排泄されたばかりの尿には雑菌が含まれていない。けっして不潔ではない。二〇五〇年代までは一部のオカルト主義者の間で、自分の尿を飲む健康法が実践されていたと、何かで知った記憶があった――のを、無理矢理に思い出して自分を安心させた。

不要物として捨てられる成分を再摂取する

のだから、長期的には何らかの害があるかもしれないけれど、短期間なら大丈夫だろう。とはいえ、舌の力を緩める気にはなれなかった。

——そうして。窮屈な姿勢で数時間が過ぎて行って。まったく眠れずに、尿意だけが高まっていく。

こんなに催すなんて、おかしい。朝食にオートミールの粥を少量食べさせられた他は水分も摂っていないのに。空腹は感じていないから、まさか半日も経ってはいないだろうに。知らないうちに利尿剤でも投与されていたのだろうか。

などという疑問を弄んでいるところではない。スーザンも、腰をもじつかせている。きっと、同じなんだ。ボールギャグの穴をふさいでいるのも。

飲んであげよう。そう思った。そうすれば、スーザンの尿意は解決される。きっと、スーザンも飲んでくれる。

マリアは意を決して、舌先をボールギャグから離した。とたんに、尿が速いピッチで滴り始めた。はっきりと水流にまでならないのは、チューブが長いから抵抗も大きいのだ。

スーザンのを飲んであげる替わりに自分のも飲んでもらう。そう思うと、吐き気は襲ってこなかった。むしろ、忘れていた渴きを思い出して、美味にさえ感じられるのだった。

マリアの尿意は、ますます募ってくる。スーザンの様子をうかがうと――頬にも喉にも筋肉の動きが見えない。飲んでくれていない。「んんんっ……んんんん」

鼻から呻きを漏らして、スーザンの関心を引いてみた。

スーザンは、ちらりとマリアに顔を向けて――ゆっくりとかぶりを振った。

そんな自分勝手な……とは思ったものの。他人の尿を飲むなんて、レイプされるよりも屈辱的だ。彼女には、それが耐えられないのだ。彼女の目にマリアは、生理的欲求に負けて尊厳をかなぐり捨て、しかも他人もそうするものと決めてかかっている――やはり、自分勝手な人間に見えているのかもしれない。そういう見方もあると、気づいてしまった。

それでもマリアは。スーザンの尿を飲むのをやめなかった。自身は尿意に苦しめられながら。

AIは、ふたりをきわめて不当に扱いなが

らも、しかし公平ではあった。

「ん`ん`ん`ん`ん`ん`ん`ん`……」

スーザンが苦しそうに呻き始めた。見ると、両手を握りしめたり緩めたりしながら、頭をのけ反らせている。電撃による警告あるいは強制。

わずかに尿意が緩くなるのを感じた。尿がチューブを流れる感触が、かすかだが感じ取れた。当然でしょうという感情と、お互い様という同情と、ごめんなさいという想いとが混じり合いながら――マリアは、緩やかな放尿の快感に浸るのだった。

続きは製品版でお楽しみください。